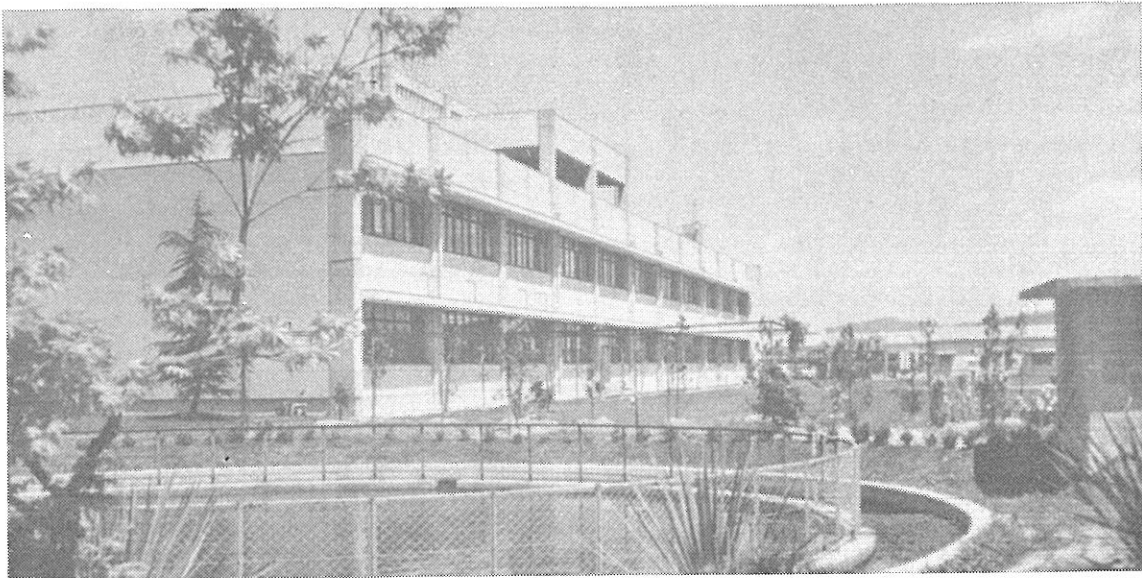


農業試験場ニュース

No. 1 昭和48年 6月



本場本館（手前の池はかんがい用貯水池）



発行にあたって

場長 川竹基弘

高度成長をつづける日本経済にとって農業の生産性を向上し、これを近代化することが緊急を要する今日の課題である。併せて農業の諸情勢の急速な変化は、逐次新しい問題を惹起し、また県民経済レベルの向上によって問題内容も多岐にわたっている。すなわち地域農業の当面する技術問題の解明、地域農業の発展方向を予測した技術開発および環境保全、生態系を重視した生産技術とか各種公害に関する調査研究などは研究の基本方針であり役割でもある。

農業試験場では、これら問題を適確に把握し、さらに集約してとりくむべき問題を明確にし、その問題解明に総力を集中するように努力している。

ところで農業試験場の成果を公表するものは、ある程度まとまった成果を発表する試験場報告、また当該年度に実施した研究課題の成績概要、人員、発表論文などをとりまとめた業務年報がある。しかしこれらの刊行物は研究関係者以外には親しみにくいという批判も多く、一般的に成果が利活用されない面があった。そのため県では手ぢかで理解しやすい「研究だより」という速報的な冊子を発行している。また場としても多岐にわたる業務の内容を有機的に位置づけ、業務の概要を簡潔に記述した研究課題編成表と試験実施計画概要を発行し関係者への便利をはかっている。しかしながら試験場が現在どんな内容の試験をしているのか、そして、どんなことがわかったのか、その点になると一般には案外認識されていないようである。すさまじい情報洪水のなかにありながら、自分自身、肝心な情報伝達の不十分さを痛感する次第である。

そこで広く関係各方面のかたがたに、試験場の主要な研究成果やこれから新しく実施する研究課題などについて理解いただくと同時に、卒直な希望なり批判なりを試験研究に反映させ、なお一層、農家に役立つ技術の開発の足がかりにするためにこのニュースを発行することにした。よろしく御支援下さるよう祈念してやまない。

成果の紹介

中苗(4~5葉)移植の機械化に関する試験

晩植を目的とする機械移植用の育苗(中苗)は、露地で苗とり(28×60cm)を考慮すると床土下に有孔ポリシートを敷くとよく、1.0~1.5mmの穴径が1cm当り1個が発根、生育、苗とりの抵抗力からみて適当で、床土下の土性は孔隙率が少なく軟かい(3 kg/cm³)方がよい。

4葉まで生育抑制を受けない播種量は、m²当り催芽糶800g(箱換算120~130g、乾糶100g弱)がよく、苗取りは、ロール状にはぎとると10a当り(約36マット)10分前後で可能であった。

露地育苗の中苗を田植機(1回かきとり14×15mm)で移植した結果、1株植付本数は5~6本が欠株率も少なく(3~4%)、その他の植付精度も良好であった。中苗のマット数は稚苗の約2倍を要し、移植時間は10a当り約1.5時間であった。6月末に4葉苗の機械移植でa当り43kgで、6葉の慣行苗手植の49kgよりやや劣ったが、6月中での移植はほぼ実用的と判断された。

(企画調査部)

斑点米の発生原因と対策試験

山間地域なかでも芸北町を中心とする西部山間地域に発生する斑点米の原因は、すでに昭和46年の試験の結果、アカミヤクメクラガメであることが明らかになった。そして、昭和47年にはその再確認と防除法がほぼ確立できた。

防除薬剤はバイジットまたはバイバッサが効果が高く持続性も長い。そして、乳熟期を中心に前後7~10日に計3回前記の粉剤を0.3~0.4 kg/a 散布すれば、ほぼ完全に防除できる。とくに発生が多い地域では、周囲の雑地や畦畔を含めた防除が効果的である。

アカミヤクメクラガメの寄主は、稲以外に出穂後の禾本科植物であることがわかった。とくに山間地に広く自生する笹が開花した年には大発生するとみられるので、今後は笹の開花した場合はとくに注意を要する。

(高冷地試験地)

生糶の高速予備乾燥方法

機械収穫をした生糶を暫定的に貯蔵し得る含水率(20%以下)まで高速乾燥する限界を、少量の糶で精密実験を行なった。その結果、5%胴割れを許容する場合、同

一の送風条件では当初含水率が高いと高含水率で胴割れし、当初が低いと低い含水率まで割れず、許容される低下量は前者で大きく、後者は小さい。また、送風の飽差が大きいと(低湿度)早くから胴割れし、飽差が小さいとおそく、送風湿度別の許容される低下量が得られた。しかし静置型実用機で同様な実験を行なうと傾向は同じであるが少量実験に比べて許容低下量の絶対値が著しく異なるので、両者間の換算方法若しくは大量糶での詳細な検討を要する。むら乾燥した半乾糶を一時貯蔵すると高水分カ所が早く変質し、水分が均一な糶に比べて貯蔵安全限界日数が約5日間短縮した。また各種含水率糶の密閉下におけるCO₂蓄積濃度の基礎数値、および密閉鉄タンクの日射下における昇温および冷却の参考資料を得た。

(企画調査部)

野菜種子のコーティング整形方法

露地野菜は間引き作業の適期中が短かく、短期間に反復集中して間引きを行わなければならない。そこで、精選された種子(発芽率97%以上)にコーティング(被覆)して一様に整形し、播種精度を高めて間引き作業を簡略化しようとした。この装置(図1)は噴射造粒法に属し、操作は上部から種子をいれスリット下部のダンパー開放後、種子が落ちない程度にバルブ(C)を開く。つぎにスリットを通過した風で造粒塔の種子を浮動させ(バルブB)、そこへ粉末を供給しながら(バルブA)これらに水溶液を噴霧させる。そして種子の表面と粉末の間に凝集力を誘起させ、未コーティング種子の相互研磨により粉末をコーティングするものである。この方法で種子を単粒高精度に整形することに成功した。

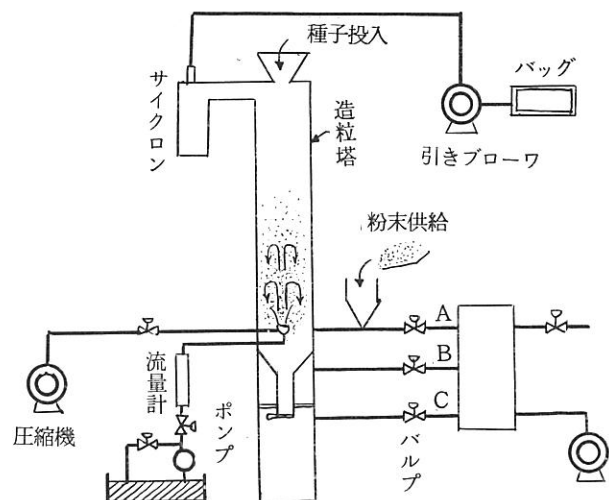


図1 模式図

エゾノギシギシの生態と防除

牧草地の有害雑草であるエゾノギシギシは、生活力が極めて旺盛で根絶は不可能とされてきたが、本雑草の生態を調査し、生態的防除について2～3の知見を得た。また、除草剤の効果を検討し有効薬剤および処理方法を明らかにした。

生態的特性については、開花後10日目の種子ですでに発芽するものがある。種子は光発芽性であるが、土中深く埋没されても休眠状態で経過し、その後発芽条件がととのえば発芽してくる。また、牛に経口給与すると糞の中に発芽力を有する種子が多くあるなど、強い生命力を持っていることが明らかになった。

主根の出芽部位は冠部から5 cm位の範囲内である。したがって、地際から5 cm以上を完全に切除すれば再生は防止できる。

除草剤は、全面処理にはアージラン液剤が最も有望であり、ATA、ポミカル水和剤およびカソロン粒剤多量処理等も殺草効果は高いが、牧草に対する影響が著しいのでスポット処理あるいは更新時処理には効果的である。
(高冷地試験地)

乾田ばらまきにおける耕耘法と

発芽苗立・倒伏との関係

乾田ばらまきでは、播種時の土壌の乾湿・土塊の大きさなどが発芽苗立に影響する。土塊の大きさは深耕によって大きく、浅耕によって小さくなった。とくに播種後の耕耘の浅深が出芽に影響し、播種前の耕・不耕にかかわらず播種後の浅耕は出芽を良くした。

乾田ばらまきで倒伏に最も影響するのは、株支持力の強弱である。株支持力は、株の埋没深が1.5 cm以上になると急に高まることが認められ、深耕によって株支持力が高まった。倒伏防止の面からは、播種後耕耘の一耕程が倒伏抵抗性を高めたが、深耕ではアール当り1 kg以上の播種量が必要である。

播種後5 cmぐらいの耕耘は、a当り600～800 gの播種量でm²当り150本の発芽、苗立が得られ、株埋没深は1.5 cmぐらいのものが多く、倒伏抵抗性の強まることが明らかになった。

(作物部)

IBP粒剤(キタジンP)による

水稻倒伏軽減効果

I B P処理によって稈長を短縮し、倒伏軽減効果のあ

ることが知られている。しかし、その効果の顕著な場合とそうでない場合がある。そこで、その要因について検討した。

I B Pは出穂25～35日前の処理が稈長短縮に最も効果があり、珪カル施用とか少肥条件では、稈長はあまり伸長せずI B Pの効果は低かった。品種間では一定の傾向があると言い難いが、稈長の短い品種は短縮効果の小さいことがうかがえた。

酒米八反35号もI B Pによって稈長短縮効果がみられるが、玄米心白の流れる傾向がみられ、今後これらの点を明らかにしてゆきたい。

I B P処理による倒伏軽減は主として稈長の短縮によるもので、下位節間の伸長し易い条件で効果が大きいと考えられ、倒伏軽減には穂肥施用時(出穂25日前)の処理が実用的であろう。

(作物部)

水田除草剤の実用化

最近、多年生雑草であるウリカワの発生が多くなった。今までウリカワに効く除草剤がなかったので爆発的に増加しつつある。ウリカワ対象除草剤としてACN剤とAM剤が登録された。ウリカワ2～3葉期処理で効果がみられるが、早い時期の処理では抑制程度にとどまる。ACNは水稻が3葉以上に生長していれば何時でも使用できるが、AMは普通移植以外には使用できない。また低温の時は薬害発生のおそれがある。

一年生およびマツバイ対象除草剤として新しい形の除草剤が開発、登録された。これはオキサジアゾン乳剤で植代代時に土壌と混和するものである。適期を失することなく使用でき省力的である。普通、効力持続期間も長く薬害も少ないが、土壌、水管理によっては持続期間の短い場合がある。

(作物部)

いぐさ田の水管理

従来いぐさ田の灌排水は、植付後2月末までの冬期間は3～5 cmの深さに湛水して、株の釣上がりや地温低下による発育障害を防ぎ、3月以後は時折り落水して土壌の還元を防止する方法がとられてきた。

いぐさ田の耕耘様式が牛耕から自動耕耘機によるロータリー耕へ移行してからは、土壌構造に変化が見られ、土層の分化が顕著になってきた。そのため土壌還元の誘起、追肥効果の減退、深植え等によって、いぐさの生育阻害が見られるようになった。

これらの打開策として、いぐさ根圏への通気をはかることが必要と考え、水管理による対策を検討した。

その結果、植付後（活着後）2月までは無湛水栽培とし、3月、4月（長い茎母芽形成期）を浅い湛水にして時折り地干しを行なう。5月の長い茎発芽時期には、施肥時以外は地面に亀裂が入る程度に落水して、土壌中への通気と追肥の浸透をはかり、分けつを促進させる。6月伸長期には2～3cmに湛水して、茎の伸長充実を助長する等の方法が、いぐさの生育、収量、品質に好結果をもたらすことが判明した。

（いぐさ試験地）

水稻に対する新しい施肥技術

安定多収をうるための後期栄養の重要性から、高冷地（大朝）と八本松の二ヶ所で、普通移植、稚苗移植および直播栽培を対象に、穂肥以後の窒素の適正な施肥方法について検討した。その結果、従来の幼穂形成期の穂肥に、更に出穂10日前施肥を加えることにより、例外なく2～9%の増収となり、しかも、食味、品質に悪影響を与えず、施肥効果の高いことがわかった。

この施肥方法は、強グライ土壌（湿田）および強粘質土壌を除く一般水田を対象にするが、普通移植、稚苗移植栽培の場合、幼穂形成期穂肥（穂肥Ⅰ）に窒素2～3kg/10a施用したものに、穂肥Ⅱとして出穂10日前にアンモニア態窒素で2kg/10aを施用する。不耕起、ばら播を含む乾田直播栽培の場合、穂肥Ⅰに窒素3kg/10a施用したものに、穂肥Ⅱとして出穂10日前にアンモニア態窒素で3kg/10a施用する。

ただし、普及上の注意事項として、堆厩肥、生わら連用水田などで、水稻の生育後期に地力窒素の発現が多く、葉色の濃くなる水田では施用しない。

（土じょう肥料部）

ベノミル剤（ベンレート水和剤）による

稲馬鹿苗病の種子消毒法について

県の中北部地帯では、最近稲の馬鹿苗病が漸増し防除対策が問題となってきている。また、従来の消毒法では水銀剤を使用するのが専らで、消毒後の廃液処理にも困難性があった。そこで、これらの諸問題の解決のため新殺菌剤の実用化試験を実施した結果、ベンレート水和剤による消毒法を確立した。

使用の方法は浸漬法で、500～1,000倍液の6～12時間と、30～50倍液の10分間がよく、消毒時の種モミはハト胸程度まで催芽させる。

消毒後の種モミは水洗いすると効果が低下するので、水洗いせずそのまま播種する。種モミ対薬量比は実用的には1対1でよく、また、消毒薬液は3～4回連続使用することができる。

本剤は昭和47年末に登録が許可されると同時に、県の病害虫防除基準に採用し、普及に移すこととし今後の防除効果に期待している。

（病害虫部）

■ 昭和47年度普及に移した技術

1. ベノミル剤による種子消毒法（馬鹿苗病）
2. 中苗（4～5葉）の機械移植栽培
3. 斑点米（アカミャクメクラガメ）の防除
4. 水稻に対する出穂10日前穂肥の施用
5. ハウス用ピーマンの有望品種
6. エゾノギシギシの防除法
7. ウリカワの除草剤（ACN粒剤、AM粒剤）
8. 1年生雑草とマツバイの除草剤（オキサジンアゾン乳剤）

新規課題の紹介

畦畔ダスター利用による

水稻散播栽培と倒伏防止

ダスターを利用して種子、肥料、農業等を散布し、ほ場内に入らないで水稻を散播栽培する省力水稻直播栽培法と湛水散播の倒伏防止技術の確立をはかる。

そのために、パイプダスターを用いた種子、肥料、濃糞等の散布むらとその生育、収量、および、ほ場表面を凹凸状にし、その形状、大きさが倒伏にどのように影響するかを調査する。

この方法によると、漏水田では、代かき後ヨウカン程度に固まった表土を凹凸状にして播種すると、その後2週間程すれば覆土したと同様な効果が期待できる。また湿田では、未耕起で凹凸状にし同様にその効果を期待している。

（企画調査部）

高冷地露地野菜の栽培法試験

北部および高冷地帯における野菜生産の現況は、夏季の冷涼な気象を利用した葉根菜類の初秋出し栽培および抑制果菜類が栽培されている。しかし、近郊産地が都市化の影響をうけて生産立地の移動がおこり、一面では道

路網の整備により、北部地域の野菜生産は今後は急速にのび、生産の団地化が進むものとみられる。

ところが、この地域は低温、積雪、多雨、寡照等特異的気象条件であるため、栽培技術上の問題点は多い。したがって、これらの条件に適応または克服するための種類、品種、作型および障害対策について検討を加え、春～秋にかけての野菜生産技術を確立し、野菜生産基地としての発展をはかる。

当面は、レタス、カンラン、白菜、大根の品種生産と作型について研究する。

(高冷地試験地)

牛ふん尿の移送方法に関する試験

酪農飼育における自然流下式でのふん尿処理は、飼育上省力的で腐熟が進み、性状が土地還元にも有利である。そこで、尿ポンプを用いて土地へ移送する方法を検討し、省力的ふん尿処理技術の確立に資するため、尿ポンプの移送能力および各種移送法の調査をする。

従来のトラクタ、トラック運搬は積みおろしに多大の労力を要し、バキュームは能力が劣り、ポンプも残率のつまりや摩耗が著しい。また、生ふんの多量還元は、飼料作への悪影響が認められている。しかし、自然流下式のふん尿は残率が細かく、また、つまりにくい羽根ポンプを利用したパイプ移送が省力的土地還元方法として考えられるので、この方法や能力の調査を本年から開始する。

(企画調査部)

高温期における施設内培地の冷却試験

最近施設園芸の発展にともない栽培時期が早まり、地温調節の必要な場面が多くなってきた。また施設規模は大型、固定化の傾向を示しつつあるが、施設の効率的利用面から、周年利用の傾向は当然起るべき問題だと思われる。周年利用を考える場合問題となるのは冬期間の加

温、夏～初秋期の高地温であるが、低温期における加温についての試験結果は極めて多い。しかし、夏期高温時における地温冷却と作物反応をみた実験例は殆んどみられない。

従来、施設内冷房方法についてはその熱収支から入射エネルギーを制限する遮光、拡散係数を大きくする換気、蒸発散を盛んにする気化冷却法などが考えられているが、作物への影響、作業能率などから経済的に可能ならば冷房を取り入れるべきものと考えられる。本試験の狙いは、地温冷却と野菜の生育反応について検討し、経済的な地温冷却のための制御方法を確立するとともに、施設の周年利用体系の確立を目的とするものである。

(園芸部)

馬鈴しょ瘡痂病対策に関する試験

近年、広島県の特産馬鈴しょに瘡痂病の多発が認められ、主産地の竹原市、豊田郡全域および因島市重井町等広範囲に及び、現地で大きな問題となっている。発生被害面積は総作付面積の30%で農家の収入減は大きい。

農業試験場では早急に対策を樹立し、農業者へ技術資料を提供する必要がある、そのため関連研究部門が協力して下記の試験を実施する。

(1) 栽培関係

基本的な防除対策は、輪作体系の確立が必要であるため、輪作体系に関する試験を行ない、あわせて品種、栽培方法に関する試験を行なう。

(2) 土壌、肥料関係

発病に関連する土壌PHの追跡調査、肥料の種類と発病関係に関する試験を行う。

(3) 病害虫関係

発病要因を解明する試験および種子消毒剤の種類と使用方法、土壌消毒資材の種類と使用方法に関する試験を行なう。

(各部協力)

研究発表

1. 論文発表

- * 樽本勲・大泉久一・井口武夫・加治正春・越智茂登一・大出春之・土居嘉明(1972) 青刈ソルガム「中国交1号」と「中国交2号」の育成について 中国農業研究 40
- * 土居嘉明・大森武(1972) ソルガム種子の簡易貯蔵について 中国農業研究 44
- * 小松武治・池宗勝三郎(1972) 鉍質土壌におけるりん酸質資材の施用に関する研究(第1報) 青刈飼料作物の収量に及ぼす有効態りん酸含量 中国農業研究 44
- * 小松武治・後俊孝・原田昭彦(1972) 飼料作物の不耕起栽培による土壌の理化学性の変化 中国農業研究 45
- * 矢田貞美・田島富男(1972) 国産中型トラクタの耐用性について 中国農業研究 45

- * 定平正吉(1972) イグサの栽培と研究上の問題点 農業技術 27-7
- * 森康明(1972) 畑地除草剤の粒、粉剤化に関する研究 第1報 増量剤の相違が除草効果におよぼす影響 雑草研究 14
- * 最上邦章・土居嘉明・古土井悠(1972) 青刈ソルガム育種の現状と問題点 多収性育種の研究 15
- * 藤井ジヅコ(1972) 水田の中型農機具一貫体系に適した作業衣の形態に関する研究 農村生活研究 16-2 (32)
- * 中沢啓一(1972) ピーマンを加害する鱗翅目害虫の生態と防除 農業及び園芸 47-12
- * 金山滋(1972) 中国縦貫道と中山間農業の展開方向 — とくに稲作の展開を通じて — 農業経営通信 93
- * 是松博文・信野尚(1972) 花きの水管理に関する研究 第1報 かん水量がキクの生育におよぼす影響について 広島県立農業試験場報告 32
- * 荒田久・最上邦章・土居嘉明・樽本勲・古土井悠・大出春之(1972) 青刈ソルガム新品種「センダチ」の育成について 広島県立農業試験場報告 32
- * 中村啓二・河野富香・井本征史・酒井泰文(1972) 予察圃場などにおけるいもち病菌菌型およびその分布型などの簡易調査方法 農作物有害動植物発生予察特別報告 24
- * 中村啓二(1972) いもち病班内の菌型の混在および長香稲上り型小病斑からのC菌型群の分出について 農作物有害動植物発生予察特別報告 24
- * 中村啓二・井本征史・酒井泰文(1972) 中国・四国地方におけるいもち病菌の菌型の類別と分布 農作物有害動植物発生予察特別報告 24
- * 中村啓二・半川義行・井本征史 尾道市美之郷町において外国稲系いもち病抵抗性品種に発生したいもち病菌の菌型について 農作物有害動植物発生予察特別報告 24
- * 河野富香・中沢啓一・梅田公治(1972) 休耕田におけるヒメトビウンカおよびツマグロヨコバイの発消長 広島県立農業試験場報告 32
- * 中沢啓一・河野富香・梅田公治(1972) 結実期の水稲から採集されたカメムシ類 広島県立農業試験場報告 32
- * 中沢啓一(1972) 黄色水盤による有翅アブラムシ発生消長調査の標準化 1、十字花科作物に寄生するアブラムシの色彩選好 広島県立農業試験場報告 32
- * 前田博文・松沢正知・滝広徳男(1972) 水稲の稚苗多植栽培における欠株の許容度について 広島県立農業試験場報告32
- * 下山根義行・定平正吉・吉崎徹磨(1972) いぐさの水管理に関する研究 第2報 3月以降の水管理がいぐさの生育におよぼす影響 広島県立農業試験場報告 32

2. 学会・研究会等講演発表

- * 日本土壤肥料学会大阪大会(昭・47・3)
河本泰・佐近剛・宮地勝正; 暖地水稲の磷酸の肥効に関する研究(第6報) 窒素の施用方法と磷酸の肥効
- * 日本作物学会中国支部鳥取大会(昭・47・7)
下山根義行・定平正吉; いぐさ本田における湛水時期がい茎の太さにおよぼす影響について
伊藤夫仁・江戸義治; キタジンPによる倒伏防止に関する研究 (1)珪酸石灰の施用とキタジンPとの相互関係
前田博文・滝広徳男・中藪正之; 斑点米の発生原因について(予報)
- * 園芸学会中四国支部大会(昭・47・8)
矢田貞美; ダイコンの発芽力直接判定法について(第1報) 沍紙の交換有無が発芽力に及ぼす影響について
大友譲二・沖森当・津田安敬; ハウスピーマンに対するかん水試験
- * 日本植物病理学会関西支部会(昭・47・11)
井本征史; ピーマンから分離されたbroad bean virus について
- * 農業機械学会関西支部例会
矢田貞美; ダイコン種子の風力精選について
- * 家政学会(昭・47・9)
日野勝子; 農村のコミュニティと施設
- * 日本育種学会第42回講演会 多収性育種研究グループ研究会(昭・47・10)
定平正吉; イグサ育種の現状と問題点

3. 図書・資料

- 綿原孝夫(昭・47・8) 宝交早生を用いたハウス早出し栽培技術 広島農業協会刊
- 信野尚(昭・47・12) 花木ハンドブック 広島農業協会刊

森昭雄・末田雄造・塚本吉郎(1972) 土地利用可能性分級図—土地利用現況図—土地分類図、経済企画庁総合開発局
 岡田正行・植木博秀・戸田春光・三輪明男(1972) 土地利用可能性分級図、土地分類図、経済企画庁総合開発局
 岡田正行・植木博秀・上本哲・戸田春光・三輪明男(1972) 土壤図、土地分類図、経済企画庁総合開発局
 中沢征三郎・上本哲・岩佐直明(1972) 地力保全調査成績土壤生産性分級図 東北部山間地域(Ⅲ)比和、口和、高野
 上本哲・中沢征三郎・岩佐直明・植木博秀(1972) “ ” 西南部山間及び盆地地域 沼田、安佐、可部、高陽、志和
 上本哲・中沢征三郎・岩佐直明・相沢博(1972) “ ” 西南部山間地域 筒賀、吉和、湯来、佐伯
 中沢征三郎・上本哲・岩佐直明(1972) “ ” 中部山間地域Ⅰ) 神石、油木、三和、豊松
 加藤雄久・木村陽登・江戸義治・前重道雅(1972) 構造改善推進のための農業機械化技術の緊急開発に関する研究
 — 水稲の移植・収穫作業の機械化栽培技術体系— 農林水産技術会議事務局
 定平正吉(1972) 総合畑作技術事典 個別作物編 いぐさ(分担執筆)

4. そ の 他

広島県農政部研究だより No.10(昭・47・12)

前重道雅・江戸義治；水稲新奨励品種「アキツホ」について
 植木博秀；水稲の乾田直播における稲わらの秋耕施用の効果
 前重道雅；水稲稚苗の葉身褐変障害対策について
 大友譲二；ハウスピーマンに対する施肥・かん水試験
 船越建明；砂栽培に関する研究(トマトおよびメロンの肥料試験)
 信野尚・是松博文；花木類のミスト繁殖に関する試験(カイツカイブキの挿木について)
 森康明；畑地除草剤の微粒剤化に関する試験(増量剤の相違と除草効果について)
 酒井泰文・河野富香・中沢啓一；ダイコンモザイクの発生消長とその被害
 半川義行；有機塩素系殺虫剤アルドリノ、ディルドリンのバレイショの生育時期、器官別の残留量および残留軽減対策について
 野田祐次郎；新殺虫剤の作用性および防除効果について—クロルフェナジン剤を中心として—
 平岡憲昭・赤木勇一；こんにゃく栽培における手入作業の適期中の拡大について
 最上邦章・土居嘉明・荒田久・古土井悠；青刈ソルガム新品種「センダチ」の特性と利用
 栗本省二・木村陽登・滝広徳男・大竹茂登；エゾノギシギシの生態と防除
 井上準郎；牧草に対する磷酸の多施用について

第6回広島県農業試験研究発表会(昭・48・3)

◎ 良質米の生産と対策

河野富香・中沢啓一・梅田公治；広島県下の水田に生息するカメムシの種類と分布
 滝広徳男・前田博文・中藪正之；広島県山間地域(主として西部)における斑点米の発生原因と防除について
 江戸義治・前重道雅；良質米新品種「アキツホ」について

◎ 花き栽培の繁殖技術と開花調節

沖森当；花き生産の方向
 信野尚・是松博文；花木の繁殖技術
 是松博文・信野尚；キクの開花調節と肥培管理

■ 人事移動

退職

石谷 武英 業務課

転出

木坂 利員 総務課 (淡水魚指導所へ)
 山原多美江 総務課 (西条農林事務所へ)
 上田 展照 業務課 (呉農林事務所へ)

中川 一幸 業務課 (呉農林事務所へ)
 三善 正道 業務課 (庄原農業改良普及所へ)
 桂 光春 企画調査部 (西条農業改良普及所へ)
 赤木 勇一 こんにゃく試験地
 (油木農業改良普及所へ)
 大隅 重昭 企画調査部 (県庁農業振興課へ)
 井上 準郎 土壤肥料部 (畜産試験場へ)
 野田祐次郎 病害虫部 (広島病害虫防除所へ)

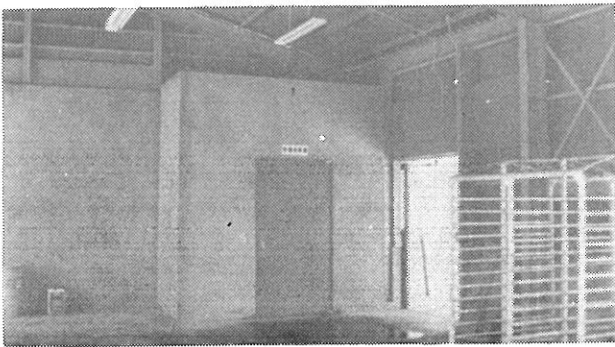
転入

向本 昇 総務課 (福山農林事務所から)
 藤本 和恵 総務課 (広島学園から)
 樋口 茂 業務課 (広島農林事務所から)
 神田三亀男 企画調査部 (県庁農業振興課から)
 土屋 隆生 作物部 (福山農林事務所から)
 邦波 邦彦 病害虫部 (可部病害虫防除所から)

新規採用

桧山 大行 業務課
 伊原 良晴 業務課
 八谷 巧 業務課
 長谷川繁樹 企画調査部

■新しい施設



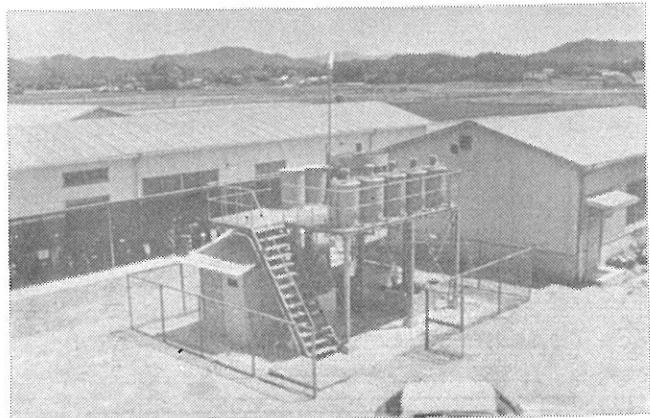
本年3月に完成した原種貯蔵庫ならびに原種作業場(優良原種を適湿、適湿に保ち長、中期貯蔵をする施設、面積114.7㎡貯蔵能力8,000kg)

場内移動

平岡 憲昭 企画調査部 (こんにゃく試験地から)
 吉田 隆徳 園芸部 (企画調査部から)
 古屋 博 園芸部 (企画調査部から)
 平田えつ子 園芸部 (企画調査部から)
 田中 謙吉 島しょ部試験地 (企画調査部から)
 谷本 俊明 土壌肥料部 (企画調査部から)

■組織の変更

昭和48年3月こんにゃく試験地(神石郡油木町)を廃止



本年3月に設置された廃水処理施設(実験室などで使用した各種薬品の使用済廃液を浄化する装置)

■その他

●昭和47年度月別参観者

| 年月 | 本場 | 高冷地試験地 | い草試験地 | 島しょ部試験地 |
|------|--------|--------|-------|---------|
| 47.4 | 名 | 40名 | 24名 | 13名 |
| 5 | 105 | 10 | 32 | 48 |
| 6 | 207 | 20 | 131 | 13 |
| 7 | 179 | 100 | 38 | 14 |
| 8 | 54 | 130 | 7 | 13 |
| 9 | 224 | 50 | 26 | 18 |
| 10 | 38 | 30 | 25 | 8 |
| 11 | 105 | 10 | 13 | 8 |
| 12 | | 10 | 5 | 6 |
| 48.1 | | 20 | 16 | 5 |
| 2 | 81 | 60 | 33 | 10 |
| 3 | 23 | 80 | 35 | 15 |
| 計 | 1,016名 | 560名 | 385名 | 171名 |

●主な諸会議・行事

| 行事名 | 開催年月日 | 場所 |
|---------------|----------------------|----------------|
| 近畿中国地域試験研究会議 | 昭48.10.18 19 | 因島市土生町 日立会館 |
| 農業経営・農村生活部会 | (2日間) | |
| 第23回日本花き生産者大会 | 昭49.2下旬 (3日間-含見学) | 広島市 広島県立体育館 |